国際交流コーナー No. 34

アダム見聞録

料理の巻

国際交流員　アダム・シモンズ

私はいままで、あまり料理をしませんでした。しかし、最近いろいろな人と料理を楽しむようになりました。

先日、国際交流協会の事業推進ボランティアの友人とお菓子作りをしました。オーストラリアでコックをしている妹のレシピを使ってレモンチーズケーキを作りました。

このレモンチーズケーキは、妹と一緒に何回も作ったことがありましたが、男4人で作れるかどうか不安でした。しかし、力を合わせて作ってみたら、妹と作ったものよりも上手にできました。

正直いうと、これまで失敗せずにできていたのは妹のおかげだと思い込んでいたのでとてもうれしかったです。

実は、このチーズケーキを作る数日前、料理を作り完成させるという楽しさやよろこびの他に、別のよさに気付いていました。それは、大府市国際交流協会が主催している国際交流サロンで、ミャンマー料理を作った時でした。

ご存じない方のために、国際交流サロンとは何かというと、大府市民のみなさんの国際交流や国際理解を深めるための会です。テーマは毎月変わります。

去年の4月からスタートして以来、スペイン語・中国語のミニ講座、無国籍ディスカッション、国際理解講座、子どもと英語で遊ぶ会、ペルー・韓国料理交流などのさまざま角度から国際交流を行っています。

12月に行われた国際交流サロンは3回目の料理交流でしたが、「チェッター・ヒィーン」というミャンマーの鳥肉料理を、ミャンマー人のトゥトゥさんとその友人に教えてもらいました。

その時に気付いたのは、料理という手段によって、とてもよい国際交流ができるということです。この記事を読んでいる方の中には、ミャンマーはどこにある国か、その国名を聞いたことのない方もいるでしょう。以前は、ビルマだったと言ったら、「ああ、ビルマのことか」と気付く方もいると思います。

ミャンマーはどんな国か、そこの人はどんな人か、文化はどんなものかなどわかる方は少ないと思います。私もその一人だから、すべてわかっているふりはしません。せっかくその国の人と話す機会をもらったのに、ミャンマーのことをあまり知らなかったので、恥ずかしい思いをしました。

「チェッター・ヒィーン」を作って、ミャンマー人がどんなものを食べるか少しわかりました。試食してみたら、カレーっぽい味で、かなり辛かったのですがおいしかったです。でもトゥトゥさんによると、ミャンマー料理は、周りの国の料理に影響されているそうです。ミャンマーの北には中国、東にはタイ、西にはインドがあると聞いたら「なるほど」と思いました。

ミャンマー料理を作るまでは、確かにミャンマーのことをあまり考えたことはありませんでした。でも「チェッタ・ヒィーン」を作って、ミャンマーの人と話して、興味を持つようになってきました。

あれからミャンマーについて調べたり、ニュースなどをもっと積極的に聞いたりしています。これからはいろいろな国の人々と出会う機会が増えると思います。こういう時代は世界の国々のことをもっと知ることが必要だと思います。国際理解は料理のような小さいことからでも始まると思います。

国際交流サロンに興味のある方は、この「広報おおぶ」をよく見てください。今度開かれる国際交流サロンで会いましょう。

国際交流サロン風景

国際交流コーナー No. 38

アダム見聞録

ここが変だよ！日本のテレビ番組の巻

国際交流員　アダム　シモンズ

大府に来てから1年が経ちました。映りが悪く、故障しかけているテレビはまだ直していません。「テレビが見られなくてカワイソウ・・・」と思う方がいるかもしれません。しかし、僕はテレビがなくても生活できるということに気付いたので、テレビを直すつもりはありません。

理由はいくつかありますが、一番の理由は日本のテレビ番組の内容です。母国のオーストラリアのテレビ番組もあまり気に入りませんが、日本のある番組を見ると「はっ？！」と思ってしまうことが多いです。

今回、アダムが選ぶ日本のテレビ番組のワースト3を紹介しま～す。

まずは、第3位。芸能関係の「ニュース番組」です。毎朝、朝食を食べている間、テレビをつけると必ず芸能ニュースが流れています。芸能人の結婚、離婚やその他のスキャンダルなどのニュースは、その芸能人のPRという目的で作られたものがほとんどだと思います。他の芸能人のお葬式を自分のPRの機会にする芸能人もいるのではないでしょうか。

ある芸能人が親戚の葬式に行ったら、翌日のワイドショー番組でその人の泣いている映像が流れていました。見ればわかるようなことなのに、その葬式にいたレポーターがスポーツのコメンテーターと同じようにその映像にコメントをつけていました。葬式はプライベートなことなのに、そこで取材するメディアと「取材してもいい」と言う芸能人は怪しいです。

次に、第2位。モラルの欠如した「ニュース」番組が多いことです。日本とオーストラリアで起こった2つの殺人事件を例にして比べたいと思います。

以前、日本で外国人女性の遺体が発見されたことがニュースとして流されました。その女性の家族が来日して、最後のお別れをしようとしたら、カメラマンや「ジャーナリスト」が取材していました。プライバシーを守ってもらいたがる被害者の父親が怒って、「放っておいてください」と頼んでもメディアの人達はそのまま家族の涙を撮り続けて、ワイドショー番組などで放送しました。

一方、去年の夏、南オーストラリア州のアデレード市で行方不明になった日本人留学生の殺人事件。30代の男性が逮捕されましたが、現地のメディアは、犯人側の情報を主に放送し、被害者側の情報はほとんど流しませんでした。被害者とその家族のプライバシーを侵さないように、南オーストラリア州の警察やメディアが気を使ったのだと思います。

また、イギリスのダイアナ妃が交通事故で亡くなられたときのこと。事故発生の原因がしつこくついていったパパラッチにもあったとわかると日本のメディアは、パパラッチを批判していた記憶が僕にはあります。しかし、人の苦しみを見せるのが趣味のワイドショー番組は海外のパパラッチの悪口を言う資格はないと思います。

そして輝ける第1位。それは日本のテレビを見ていると、「日本はまだ男の社会だな」と思うこと。あるバラエティー番組がそれを象徴していました。内容は、水着姿の若い女性達が自分のバスト、ウエスト、ヒップのサイズを言っていたことです。オーストラリアでは、訳もなく女性は水着姿になりません。なぜかというと女性は人間より男性が楽しむ「物」として描かれてしまうからだと思います。

日本を男女共同参画社会にするためには、テレビなどのメディアに作られている女性のイメージを考えることが必要だと思います。

こういった内容のテレビ番組は、黙って見なくてよいのではないでしょうか。日本人の友達の中でも、こういう番組が気に入らない人は多いです。気に入らないなら、我慢して見てしまうより、テレビを消してもいいですよ。

国際交流コーナー No. 39

アダム見聞録

日本のどんなところが好き？の巻

国際交流員　アダム　シモンズ

ときどき日本人に「日本のどんなところが好き？」と聞かれます。日本には、魅力あるのところがたくさんあると思います。オーストラリア人である僕は、昔の日本が好きです。

日本に来る多くの外国人観光者は、先端技術の都市東京に行きます。また、京都や奈良のような寺がたくさんあるところも訪ねます。短い間しか日本にいられない観光者はその独特な雰囲気を味わいたがると思います。ずっと日本にいると、現代生活や社会が嫌になる時もあります。そういう時、別の日本が見たくなります。

昔の日本が、現在の日本よりよかったという話は別にして、外国人にとっては昔の日本は現在の日本よりおもしろいのではないかと思います。

現在の日本のまちは、近代化で欧米のまちに似てきてしまって、いつか欧米のまちと区別ができなくなるかもしれません。「本当の日本」が少しずつ消えていってしまうと考えると悲しいです。完全に消えてしまったら、どこに行けば日本にしかない素晴らしさが経験できるのでしょう？

でもまだ寺、神社、城などの昔の日本の雰囲気を経験することができるところは残っているので、まだ絶望するのは早いと思います。

また、昔の日本を探検しながら勉強できるような博物館もいくつかあります。そういう博物館に行くと、日本人は本当に自分の国の歴史や伝統を大事にしている感じがして、うらやましくなります。（オーストラリアの歴史は1780年代に始まって、まだ浅いとよく言われています。それまで、アボリジニーの人達は何万年もいましたが・・・。またの機会に話します）

5月12日に大府市国際交流協会主催のバスハイクに参加して、35人（ペルー、ブラジル、日本、オーストラリア）の人達と一緒に犬山市にある博物館明治村に行って来ました。ご存じの方も多いと思いますが、明治村は主に明治時代に建てられた建物を保存するための野外博物館で、日本全国、アメリカ、ハワイ、ブラジルから運ばれた67軒の建物があります。日本の国際交流を考えると、幕末から日本が欧米と貿易などの交流をし始めて、明治時代にその国々の文化や物も取り入れ、日本の物にし始めたので、明治時代は重要な時代でした。

明治村に行って、今でもよく感じる日本の欧米に対するコンプレックスのルーツとか、大東亜戦争や太平洋戦争の原因も少し分かって、日本は欧米を真似することは本当によかったのかなと、考えさせられました。

明治村バスハイクは国際交流協会の事業推進ボランティアが企画した事業で、当日はグループリーダーとなって外国人や日本人の参加者と一緒に行動しました。皆でお弁当を食べた後、日本の遊び（「だるまさんが転んだ」、「花いちもんめ」など）を通して他の参加者やボランティアと楽しく交流をしました。いろいろな国の人と交流するだけではなく、外国人に日本の歴史や文化の一部を紹介するよい機会でした。外国人も、日本人も、ボランティアも含めて100年以上前の日本の雰囲気を楽しみながら非常にいい勉強になったと思います。とても楽しい一日でした。

国際交流協会やボランティアについてご質問がありましたら、市役所の企画課国際交流係（☎45－6212）までご連絡をください。

犬山市にある博物館明治村にて

国際交流コーナー No. 40

アダム見聞録

「10年間英語を学んできたのに全く話せない」の巻

国際交流員　アダム　シモンズ

「10年間英語を学んできたのに全く話せない」という方に、今まで何百人も会いました。

日本人にとっては、英語を身に付けることは非常に難しようです。もし私が日本人だったら英語が話せるようになることをあきらめたと思います。英語を真剣に勉強している方を尊敬します。

「アダムの英会話教室」に参加し、真剣な表情で英会話を学んでいる受講生

今回、英会話が上達できるアドバイスを書いてみました。役に立つとうれしいです。

恥ずかしがらずに言葉を話してみましょう。

英会話の教室に通う人の中にも英語を話す勇気が出ない人は少なくありません。しかし、話さないと自信はつかないと思います。話そうとしないなら、勉強しても意味がないと思います。

言うことは簡単だと分かっていますが、授業以外でも話さないと、せっかく覚えたことを忘れてしまうので、できるだけ話してみましょう。

上手に話せなくてもいいです。

よく聞くと、ネイティブ（英語を母国語としている人）でも文法的に正しい発言はあまりありません。政治家や俳優などは台本を読んでいるから完璧に話しているようにみえるかもしれませんが、台本がなかったら別人かと思う程話し方は変わります。

ネイティブの人ですら完璧でなく間違える場合があるのですから、ノンネイティブの方なら多少の誤りはもちろんOKです。一番大事なのは伝えたいこと（意味）が通じることです。

コミュニケーションは2人でやらなければなりません。

話す方は相手に理解してもらえるように話さなければなりません。さらに、聞く方は話す側以上に、話の内容を理解しようとしなければなりません。ですから相手に合わせる必要があります。合わせようとしてくれない人もいますが・・・

分からなかったら、聞きましょう。

相手の言ったこと（英語）が聞き取れなかったときや理解できず分からなかったときに「Yes」と言ってしまう日本人は多いです。しかし、同じ場面で日本語の場合だと「はい？」と言って、イントネーションで聞き取れなかったことや理解できずに分からなかったということが伝えられますが、英語では大変なことになるかもしれません。

例えば、空港の税関を通るときに「Are you carrying any drugs？（麻薬を持っていますか）」と聞かれて、聞き取れなくて「Yes」と答えてしまうと、楽しみにしていた海外旅行はそれで終わってしまいます。（国によりますが人生の終わりでもあるかもしれません）。

ですから分からなかったらちゃんと謝って繰り返してもらうか、もっと分かりやすく説明してもらうようにしましょう。

最後に、どうしても英語を身に付けることができない場合は、他の言葉もたくさんあるので、挑戦してみてください。

自分に合う言葉はきっとあると思います。

アダム見聞録

ロンドンへの近道　の巻

国際交流員　アダム・シモンズ

7月にイギリスのロンドンに行ってきました。いろいろと経験でき、とても勉強になりました。私がロンドンに行った理由は、自分の素性がもっと知りたかったからです。昔、私の母国オーストラリアは、イギリスの植民地でした。最近、日常生活の中でのイギリスとのつながりは薄くなってきました。しかし、習慣や文化については、まだまだイギリスの影響を受けていると思います。

ロンドンへ行ったら、自分の母国オーストラリアについてもっと分かるようになると思いました。ロンドンは2000年の歴史があるまちです。それゆえに歴史を感じさせる場所が多く、非常に面白いまちだと思います。

今回、ロンドンで見たことや考えたことについて書かせていただきたいと思います。

まず、ロンドンではちょっとした日本ブームが起きていて、驚きました。例えば、ある有名なスーパーには、店内に寿司がいっぱい並べてありました（写真）。和食レストランも意外と多く見かけます。久しぶりに洋食を食べたいと思っていた私は、和食を食べませんでしたが、海外に行って和食が恋しくなる人にはロンドンは安心です。

ロンドンは世界一の国際都市かもしれません。昔から観光、仕事、勉強などさまざまな目的で世界中から人がロンドンに集まってきました。イギリス人のイメージは偉そうな白人と思っている人がいるかもしれません。しかし街中では白人だけでなく、アフリカ、中東、南アジアなどの元々はイギリスの植民地だった国の人も見かけます。中華街もあり、アジア系の人も多いです。あと、母国語が英語の国なのに、英語以外の言葉を話す人がけっこういます。バスに乗っていたら、3、4カ国語が聞こえてくることもあります。

日本語もたまに聞こえてきます。特に若い日本人をよく見かけました。観光で来ている日本人はきっと多いでしょう。また、留学や仕事で来ている人も多いと思います。どうしてロンドンはあんなに人気があるのかと考えてみたら、やっぱり国際的な都市で、誰でも安心して暮らせるからだと思います。

1897年から1942年までロンドンに住んでいた画家牧野義雄もロンドンの人たちの人種に対する寛大さに驚いたといいます。私は以前、アメリカに行ったときに差別されたことがあります。ロンドンの人たちはとても親切でした。昔の大英帝国といわれていた時代に世界中からいろいろな人達がロンドンを訪ねたりしていたからロンドンの人たちは外国人の姿に慣れているのかも。100年以上も前の時代に、日本人を見ても不思議に思わなかったといいますから、いかに国際化が進んでいるのかがわかります。（今は、2002年なのに、私が大府市内で買い物をしたり、散歩をしたりするとじっと見られることがあります・・・）

大府市はロンドンではないとわかっていますが、大府市にもいろいろな国の人たちがいます。日本語も、英語も話せない人もいますが、皆同じ人間です。外国人がいるだけで大府市が国際都市になる訳ではありません。「外国人」より「同じ人間」として受け入れる心を持つことがロンドンへの近道です。

『広報おおぶ』2002年8月15日号

国際交流コーナー

No.43

アダム見聞録

国際的な大府をつくる国際交流協会の巻

国際交流員　アダム・シモンズ

今年、大府市国際交流協会（OIA＝Obu International Association）は設立10周年を迎えます。12月8日には記念事業を行います。

OIAの設立を契機に、国際交流に関心を持っている方々が力をあわせ、この10年間、大府市の国際化に大きな貢献をしてきました。国際交流は「時や場所を選ぶ」というものではありません。

現在の国際関係の状況から考えると、平和な世界から一歩後退してしまいそうな雰囲気です。国際交流や異文化交流は日本だけでなく、全世界の国々に必要です。

OIAで活動しているボランティア、そして支援している会員は、国際交流の必要性を理解しているから、国際的な大府市のためにがんばっています。

OIAのボランティアはさまざまな活動をしています。もちろん、ハイキングや料理サロンのような市内に住んでいる外国人と交流できる行事もあり、短期で来日する外国人を受け入れるホームステイもあります。また、古着回収や募金活動のような国際協力という目的の行事もあります。それから、国際理解や国際的な意識や知識を広めるために、フェアトレードの紹介、言語やその他の講座などを行っています。

市内在住外国人へのサポートにも力を入れています。例えば、外国人向けの情報誌「ほほえみ」を5カ国語で発行しています。また、日本語教室や外国人相談を行うなど、外国人の市民も日本人と同じように安心して生活ができるように支援しています。

私の母国であるオーストラリアには、国際交流協会のような団体はありません。日本に来た当初は「なぜ、日本には国際交流協会があるのか」、「国際交流協会は本当に必要か」などとよく考えました。

オーストラリア人の立場でいうと、日本人の国際交流は、わざとらしい、無理やりな国際交流にみえます。しかし、こういう国際交流をしなければならないのは、日本には日本人以外の人が少ないからです。

最近、日本の出生率が下がっているようですが、移民で日本の人口を増やそうという提案はなぜか聞きません。

オーストラリアはいわゆる多文化社会で、日常生活のなかで自分と違う人種の人と出会ったりすることができます。それゆえオーストラリアの子どもたちは、ごく自然に学校や放課後に他人種の子どもたちと遊んでいます。日本の子どもの多くは、外国人と触れ合うことができるのは学校の英語助手や英会話学校の先生ぐらいでしょう。

日本にたくさんの外国人を入れなくて、日本を国際的な国にしようとするなら、国際交流協会のような団体でやってみるのが一番良い方法かもしれません。

私の考えでは、国際交流協会の目的は、国際交流協会の必要をなくすことです。いつか、日本でも日常生活で自然に自分と違う人種の人々と触れ合える日が来たら、無理やりな国際交流をやる必要がなくなります。

しかし、その日はまだかなり遠いので、国際交流協会のような団体の役目はまだまだ重要だと思います。国際的な大府を一緒につくってみませんか？

96年に開かれた協会主催のパーティー

『広報おおぶ』2002年10月15日号

国際交流コーナー No.44

アダム見聞録

大きな危機があることに気付きましたの巻

国際交流員　アダム・シモンズ

最近、オーストラリアの多文化社会だけではなく、日本も含めて各国の国際交流や理解に大きな危機があることに気付きました。

先日、オーストラリアにいる親戚と電話で話したときのことです。親戚の言葉に大変驚きました。敬けんなキリスト教徒で、寛大な心を持っていると思っていたその親戚は、いきなりイスラム教徒の悪口を言い出しました。私は学生のころ、教育実習でオーストラリアに移民してきたイスラム教徒の子どもたちに英語を教えたことがあります。その子どもたちは、明るくてとても好意的でした。そのことを思い出すと、親戚の言葉は厳しく、子どもたちがあまりにもかわいそうに思え、つい親戚と口けんかになりました。親戚はどうしてそういう不愉快なことを言ったのでしょう？

その親戚は、先月起きたバリ島の爆弾テロ事件や、オーストラリア国内で起きたイスラム教徒による暴行事件を、極端な言葉で語りました。こういう情報はどこから手に入れたのかと聞いたら、テレビや新聞などのマスメディアからと言いました。

確かにマスメディアは真実をニュースで国民に伝えます。しかし、記事の取り上げ方によってその「真実」が、曲がったように見えることがあります。例えば、私の親戚のイスラム教徒に対する悪いイメージは、イスラム教徒が悪いのではなく、オーストラリア内の一部のマスメディアがイスラム教徒の否定的なニュースばかりを取り上げているからです。

オーストラリアには、現在30万人のイスラム教徒がいます。そして、ほとんどすべての人が、オーストラリアの多文化社会へ溶け込んでいるという真実もあります。マスメディアは何故かそのような、よい面は取り上げていないようです。結局、真実の一部だけが伝えられてしまいます。これは日本の一部のマスメディアにもあるような気がします。

多くの人はニュースで流れた情報でしか判断できないために偏った考え方になるのでしょう。ニュースを見る時だけでなく、人の話を聞く時も、人間はよくこういう風に思い込みをします。

日本でも「あの国の人については、あまりよくない話を聞く」と言います。「あの国」の人に会ったことはないのに「あの国」の人たちは、みな「残酷だ」と判断してしまう人が多いと思います。ここで考えていただきたいのは、もし日本人が海外で暴行事件の犯人として逮捕されて、その国の人たちが「日本人は残酷な人種だ」と判断されたら・・・。それは「間違いだ」、「誤解だ」と声を出したくなりますよね。

日本人、オーストラリア人など人種に関わりなく、またイスラム教徒、キリスト教徒など宗教に関わりなく、悪いことをする人もいれば、こころの優しい方もいて、全体でみればよい人の方が圧倒的に多いのです。

ニュースやうわさ話ですべてを判断するのは異文化理解や国際理解の障害になり、危険だと思います。マスメディアや人の話より、自分で調べたり、自分の目で見たり、自分で考えたり、自分の経験から判断することです。日本のことわざにも、「百聞は一見に如かず」というのがありますね。

これからの平和で公平な多文化社会をつくるためにはこういうことは重要になると思います。

『広報おおぶ』2002年11月15日号

国際交流コーナー No.45

アダム見聞録

「マクベス・魔久兵衛」の巻

国際交流員　アダム・シモンズ

11月に開催された大府市芸術祭「マクベス・魔久兵衛」という劇に出させていただきました。7月にオーディションを受けて、8月から読み合わせと稽古をしてきました。振り返ると「長かった」と思いますが、いろいろな人たちと出会って、新しい経験もたくさんできました。

W・シェイクスピアの「マクベス」は元々英語の劇です。高校2年生のときに国語の授業で勉強しました。かなり暗い話ですが、内容を理解すれば、なかなか楽しめることができます。

出演の動機は、小さいころから俳優になりたかったと言ったら嘘です。興味を持ったのは、シェイクスピアの古くて難しい英語版の「マクベス」を日本語に翻訳して日本風にアレンジしたらどうなるかを、演じる側から見たかったからです。

舞台に上がったことは初めてです。なにもかもが新鮮。最初の読み合わせや稽古は緊張しました。私と同じように、市民でオーデションに合格した方もいましたが、そのほかの人はプロでしたから。そのときは「オーディションを受けるんじゃなかった・・・」と思いました。でもプロの方も、大府市民の方も皆とても親切で、時間とともに恐怖感はほとんど消えました。さらにリラックスできたのは、プロの方でも台詞などを間違えることでした。「プロに迷惑をかけちゃダメ。だから失敗できない」とすごく緊張していましたが、あるプロの方の「まだ起きていたのか」という台詞を「まだ生きていたのか」と間違えたところを見て、ちょっと安心しました。台詞を飛ばしたり、出番のタイミングを忘れたりするようなミスが多かったです。そういうときは、間違えた人も、他の出演者やスタッフも笑っていたので、とても楽しい雰囲気でした。

「マクベス」の本来の舞台はスコットランドですが、今回は日本の鎌倉時代の東海地方に置き換えた話になりました。衣装も和服になったので、袴と足袋を履かなければなりませんでした。帯の結び方が難しくて「昔の日本人は毎日こういう物を着なければならなくて大変」と思いました。現在の日本では見かけない珍しい物を着ることができて面白かったです。

日本人はどうして和服を着なくなったのでしょう?伝統の和服を見かけなくなったことは、ちょっと残念ですね。

私はほかの出演者やスタッフに迷惑をかけてしまいました。他の出演者のようにきれいな日本語が話せませんでした。また、登場人物は皆日本人ですから、私の髪の色（金髪）が問題になるところでした。かつらがなく、染めるのも嫌でした。スプレーで黒くしようという話が出ましたが、私は幻影というちょっと怖い役なので、普通じゃない方がいいという意見が出て、結局自然の不気味さでやらせてもらいました。

マクベスで熱演する市民

「マクベス」に出て、一番よかったと思うことは、多くの人に出会えたこと。先生方をはじめ、出演者、セットづくりなどに苦労した劇座の皆さんと過ごした時間は大変勉強になりました。同じ大府市民である清水さん、二村さん、竹内さん、大河内さんと一緒に出演できて、親しくなれてうれしかったです。一緒に出演した皆さん、見に来てくださった方々、本当にありがとうございました！

機会があったら、また出させていただきたいと思います。そのときは皆さんも、挑戦してみてください。

『広報おおぶ』2002年12月15日号